

Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

第一〇二回定期演奏会

(第一〇〇回定期演奏会記念シリーズ——⑤)

日本の楽器でえがく音の絵本

一九八八年一月二十日(水)

一月二十二日(木)

芝 a b c 会館ホール

午後七時開演

主催 日本音楽集団・現代邦楽協会

ごあいさつ

今回、劇団「民藝」の高橋清祐氏のご協力を得て、大橋喜一作「めるへん ほうきぼしとチョコレート」(稲垣足穂「チョコレート」による)と米倉齊加年作「多毛留」を上演することになりました。「多毛留」には米倉氏自身が、また二日目には日色ともゑ氏が出演してくださることにこの上ない喜びを感じています。日本の楽器でえがく音の絵本として大人から子供まで楽しめるコンサートになればと念願しています。

日本音楽集団の今後の一つの大きな課題に、歌や語りなどの「声」を伴った作品の開拓があります。そのためには、種々な問題を乗り越えなければなりません、従来の型や様式にとらわれずに、また失敗を恐れずに今後も冒険を続けようと思っています。

作曲した内田とも子、秋岸寛久をはじめ若手団員を中心にした今回の体験が、集団の今後の活動の幅を広げてくれることを大いに期待しています。

田村 拓男

プログラム

めるへん

ほうきぼしとチョコレート

稲垣足穂「チョコレート」より

(初演)

作	大橋 喜一
作曲	内田とも子
構成・演出	高橋 清祐(劇団「民藝」)
照明	中山 功
指揮	高橋 明邦
合唱指導	新川比呂子

語り・演奏

	20日	21日
ボンパイ	宮 越 圭子	坂 田 美 子
アリス 1	久 東 寿子	福 井 久 代
アリス 2	山 田 明 美	中 野 は る な
アリス 3	山 田 ま ゆ 美	工 藤 哲 子
かじ屋の親方	望 月 太 喜 之 丞	望 月 太 喜 之 丞
ある 男	藤 崎 重 康	素 川 欣 也
ある 女	工 藤 哲 子	田 中 悠 美 子
ロビン(笛)	西 川 浩 平	竹 井 誠
尺 八 I	藤 崎 重 康	米 澤 浩
尺 八 II	水 川 寿 也	素 川 欣 也
三 絃	工 藤 哲 子	田 中 悠 美 子
琵琶	坂 田 美 子	山 田 ま ゆ 美
二十絃 I	花 房 は る え	花 房 は る え
二十絃 II	中 野 は る な	山 田 明 美
十七絃	福 井 久 代	久 東 寿 子
打 楽 器	望 月 太 喜 之 丞	望 月 太 喜 之 丞

とても不思議な思い

大橋 喜一
(劇団「民藝」)

稲垣足穂という不思議な作家がいて、いまから65年前の1922年に「チョコレート」という童話を書いた。足穂先生より17才若い私が、50年以上たつてこの童話をよんで、それに魅せられ、芝居にしたいと考えつづけた。

その私のもやもやを現実化したのが演出家の高橋清祐君だ。若い俳優の訓練用ということで、私は戯曲「ほうきぼしとチョコレート」を書きあげた。

高橋君がどのようにして作曲家の内田とも子さんと、このメルヘンについて話合いをしたか私は知らない。私はあるとき高橋君が持参したテープで、打楽器を主体とした内田さん作曲になる音楽をきいて、思わずひき込まれていった。音楽劇なんてものの経験はまったくないのだが、私はこの戯曲の音楽劇台本化を引き受けた。

音楽劇のもっとも中心的な作者は作曲家であつて、台本作者はその一歩うしろにあるべきだと思っている。

この本の主人公のひとり、妖精のロビン・グッドフェロウは、視覚的存在ではなく、音として存在し、舞台を支配する。これは、まさに音楽劇にしてのみ可能な奇抜な表現だ。

こうして足穂先生に発するところの幻想が、65年の年月を経て舞台上に華咲く。

なにか、とても不思議な思いがします。

めるへんの世界

内 田 と も 子

このお話は、ボンパイという男の子と、彼が出会った妖精—ロビン・グッドフェロウの話です。

今は妖精をやめてほうき星になったというロビン……本当でしょうか？

色々とは不思議なことも起こります。

ロビンはもともと妖精ですから、人間とはちょっと違う言葉を話します。そのロビンの話をここでは笛で表現しています。それを私達に伝えてくれるのは、ボンパイと三人のアリス達です。つまり、彼らは、ロビンと私達の間をつなぐ通訳みたいなものです。

でも、もしかしたら、みなさんの中には、ボンパイやアリス達みたいに、ロビンの言葉がわかってしまう人もいらっしゃるかもしれませんね。

多毛留 (たける)

(偕成社版
ポローニア国際児童図書グラフィック大賞受賞)

(初演)

絵・文 米倉齊加年
作曲 秋岸寛久

構成・演出 高橋清祐(劇団「民藝」)
照明 中山功
指揮 高橋明邦

	20日	21日
語り	米倉齊加年(客演)	日色ともゑ(客演)
演奏		
笛	西川浩平	竹井誠
尺八I	藤崎重康	米澤浩
尺八II	水川寿也	素川欣也
胡弓	花房はるえ	花房はるえ
琵琶	坂田美子	山田まゆ美
二十絃I	中野はるな	久東寿子
二十絃II	福井久代	田中静子
十七絃	宮越圭子	山田明美
打楽器	望月太喜之丞	望月太喜之丞

多毛留

米倉齊加年

私は福岡の生まれです
玄海灘のむこうは朝鮮です
小さい時から朝鮮を知っています
いま私には たくさんの朝鮮人の友だちがいます
朝鮮はとなりの国です
日本とはながいながつきあいの歴史があります
そのことを子どもたちに伝えたいと思って
絵本をつくりました

この話は 私のまったくのつくり話です 原話 原本はありません
八年くらい前に一度 雑誌「未来」に発表したものです
1976年9月7日

(偕成社版「多毛留」より)

「多毛留」の作曲にあたって 秋岸寛久

この「多毛留」という絵本は読み返すたびにいろいろなイメージがひろがって、奥の深さ、スケールの大きさを感じますが、その分、音を付けるのはたいへんな作業でした。音ですべてを語ろうとせず、語りと映像と音楽が対等の立場で一つの世界を築くよう考えて作りました。

今回の客演者



米倉齊加年(劇団「民藝」)
(1月20日<水>)



日色ともゑ(劇団「民藝」)
(1月21日<木>)

「音」と「言葉」

高橋清祐

音楽を聴くと、心に直接、働きかけて来る感動がある。特に邦楽の場合、その共鳴は深い。それどころか、自分の魂の故里というか過去にまで逆昇って母の胸に抱かれて居た頃のぬくもりと抱擁力を想起こされる。やはり、日本の音だと思ふ。

いつも客席に坐って単なる受け手に過ぎなかったのだが、日本音楽集団のお誘いがあった、創り手の一員として参加させて頂いた。

二つの作品とも、「言葉」がある。「言葉」という音と、音楽とを対等に組み合わせることによって、より具体的に「音」の表現力の深さを、力強さを、そして魅力を引き出せたらと思っている。実際に創る作業に入って思っている程、簡単ではなかった。しかし、チャレンジは続いている。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏



オリジナル立奏台

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL (792)8481

祝

100回定期記念シーズン



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25
オリオンシャトー1F
PHONE. 03-397-2292